

振られた夜。男は静かに泣いた。すでに千鳥足になりかけていた。男の本能はまだまだ酒を求めていたが、理性はこれ以上飲むのならば場所を選べと叫んだ。男は一駅分だけ電車で移動し、行きつけのバーに向かった。まだ理性の方が優勢のようだった。

薄汚れたちいさなビルの三階にあるバーの店員は付き合いの長いその客の酔い様を見た時、驚いた。若い頃、イタリアの飲食店で働いていた時にマフィア同士の抗争を目の前で見た時ほどではないが、だいぶ驚いた。その客——男が店に通うようになってから八年になるが、バーに訪れる客の中でも三指に入るその男のはつきりと酔う様はそれほどにめずらしかった。意外性と希少性が驚きの元だった。

暇していたためグラスを磨いていた店員は男の有様に驚いたが、すぐに席に案内し、心配の目を向けた。しかしはずけずけと内心を暴くようなことはしなかった。

「今日はどうする？」

「オクトモアの度数の高い方をロックで」

「…ん、了解」

その注文を受けるのに迷いが無かったと言えば嘘になる。疲れるようなことがあった日はすぐに帰宅して寝てしまうのが一番で、酒を呑みだくれるのは間違いだと、三十五歳の店員は知っていた。ただ、そう分かっていても酒を呑まなければやってられない日が誰にしもあるということも実体験として知っていた。

「チーズは、どう？」

「いや……、ああ、やっぱり頂きます」

店員はおだやかにうなずき、棚から漆が塗られたような色のボトルを取り出し、丸い純氷を入れたバカラにそれを注いだ。丁寧な動作だった。

「どうぞ」

おつかれ、という言葉が潜まされ、酒とチーズが提供される。酒の量はかすかに多く、チーズの枚数がいつもよりも二枚多かった。

「……」

いつもは、頂きます、と言ってから口をつけるその男は、何も言わずにそれを呑んだ。深く、ふかく、息を吐く。鼻腔が香りで満たされる。男はわずかに顔をほころばせた。

店員は安心し、彼自身も意図せず固くしていた表情がゆるんだ。ゆるんだ表情はすぐに違う感情に染まった。それは疑問だった。店員はなぜ客が自分の顔を不思議そうな目で見ていいのかわからなかった。その理由を問うよりも先に、客が訊いた。

「……なにかありましたか？」

男はどこか固かった店員を気にしていた。それが弛緩したから、安心してそう訊いた。

店員は呆れ、同じようなことを訊き返した。

その晩、ふたりは「店員と客」という関係性から、「友人」という関係性に成った。